

ロビンキャットは いつ帰る

はたがし 作

織茂基子 絵



■著者紹介 はた たかし

1921年愛媛県西条市に生まれる。その後を松山、東京で過ごし、戦後、出版社の記者を経て帰郷、中学の国語教師を長く勤めた。現在、桃山学院短期大学講師。日本児童文学者協会会員。

主な作品に『月夜のはちどう山』『はちどう山あなほり商会』『海賊ヒックがやってきた』『とべ！ねぼすけくじら』などがある。

*現住所＝〒793 西条市大町838-8

■画家紹介 織 茂 恭 子

1940年群馬県に生まれる。東京芸大油絵科卒業。『まほうのクリスマスツリー』で初めて出版の仕事をてがける。

主な作品に『じゅずが原争奪記』『ねこねこえほん』『走れあまんじゃく』『きつねの窓』『きつねさんのおうち』『ぺっこん』『トイレとつきゅう』『ねこのさいみんじゅつ』『コックさん』『どろんばっけてねこのみち』などがある。

児童出版美術家連盟会員。

*現住所＝〒165

東京都中野区大和町3-12-5

913

はた たかし

ロビン・キャットはいつ帰る

国土社 1980

104P 22×19cm (国土社の新作童話10)

基本カード記載例

ロビン・キャットはいつ帰る <国土社の新作童話10>

著 者 はた たかし ©1980

1980年1月10日 初版第1刷発行

発行者 長 宗 泰 造

印刷所 厚 徳 社

発行所 国 土 社

〒112 東京都文京区目白台1丁目17-6

電話 東京943-3721／振替 東京6-90631

落丁・乱丁の本はお取りかえします。 <検印廃止>

ロビン・キャットは いつ帰る



はたかし 作

織茂基子 絵



もくじ

1 おまじないの歌.....4

2 お月さまをとびこえろ.....11

3 カザスキ王国の黒い森.....22

4 敵^{てき}か味^み方^{かた}か.....33

5 「メバカカネコノ」.....43



6 かこまれたとりで.....56

7 ゴシヨ堂どうの森のなかまたち.....70

8 くたばれヨロイ軍団ぐんだん.....79

9 マタタビ大作戦だいさくせん.....95

あとがき.....104



1 おまじないの歌



バットにグローブをさしたのを、かたにかついだ学の自転車まなぶが、キキーツと家の前に止まると、妹の舞まいがいそいでとびだしてきた。

——宿題はなにもないし、日が長くなって、おそくまで遊べるし、春休みはいいな。今夜こんやは、おとうさんと将棋しょうぎでもしようかな。

のんびりと、そんなことを考えながら走ってきたものだから、もう少しで、自転車を舞まいにぶつけるところだった。

「ばかもん。あぶないじゃないか。」

「でもさ、これ、早く見てよ……。クウの帰ってくるおまじないの歌だつて。きょう、歯医者さんの待合室まちあいしつで、知らないおばあさんが教えてくれたのよ。受けつけの人がホッタさんってよんでいたかな……。そのホッタさんのうちには、ねこが七ひきもいるんですって。まっ黒な、長い洋服ようふくを着た、西洋のおばあさんって感じの人ね。……わたし、手帳にその歌を書き

つけてきたんだけど、なにがなんだかわからないへんな歌なの。」

「よつくしやべるな、舞まいは。まあ、落ちつけ、落ちつけ。」

舞まいがかわいがっていたシヤムねこのクウが、夜のおさんぽに出かけたきり、帰らなくなったのは、十二月の二十五日だった。あれから三か月あまりになるのに、ゆくえはまったくわからないのだ。

近所の人や、友だちからも「しばしも休まぬマイちゃん」とよばれているほどの、元氣げんき者の舞まいが、しょんぼりとクウの帰りを待っているのを見ると、学まなぶもかわいそうに思っていた。

きょう、歯医者さんで会ったホツタさんのおばあさんは、クウがいなくなったことを聞くと、

「それならね、おじょうちゃん、おまじないの歌を紙に書いて、戸口にはりだしておけばいいのよ。マツトシキカバイマカエリコム、ってね。わたくしのうちでも、なん度もそうやって、いなくなっていたねこちゃんが、ぶじに帰ってきましたのよ。」

と教えてくれたのだ。

多い時には十ぴき以上いじょうもねこをかっていたという、そのおばあさんから、おまじないのことばを聞いていると、舞まいは、きつと、クウも帰ってくるよ
うな気がしたという。

「マツトシキカバイマカエリコムか……。意味がわからなくなつたてき、
それでききめがあればいいんだろ。おまじないって、そんなもんさ。アブ
ラカタブラだの、ビビデバビデブだの、なんのことだかわかりやしないじ
やないか。」

「そうね。お兄にいちゃん、すぐ書いてくれる。紙とマジックインク持つてく
るから。」

「いいよ。クウと舞まいのためならね。」

いつも、こんなにやさしいお兄にいさんと満点まんてんなんだけど。

門とげんかんのあいだの出まどの下に、できあがつた紙をはりつけると、
兄妹きょうだいは安心して、そつと家のなかへ入った。なにも、足音をしのばせなく
つてもよかつたのだが、おまじないというのは、ひみつにやったほうが、
ききめがありそうな気がしたのだ。



その夜、お父さんが帰ってくると、その暗号はたちまち解けてしまった。
「なあんだ。おまえたち、そんな紙をはり出したのか。門の内が暗くって
気がつかなかったけど。」

「わたしも、お買物から帰ってきて、お勝手口から入ったので、ちっとも
知らなかったわ。」

そこで、お父さんとお母さんは同じことばをいっしよにいいかけて、顔
を見合わせて笑った。

「百人一首……。」

「立ち別れ、いなばの山の峯に生うる」

お父さんが節をつけていいかけると、お母さんがそれを受けて、あの、
おまじないの歌をとなえたのだ。

「マツトシキカバイマカエリコム」

でも、学にも、舞にも、もちろん、なんのことだかわからない。

「あつ、お父さんもお母さんも、そのジュモン知ってたのかア。」

「小学校四年生と、二年生じゃ、知らないのもむりはない……。これは

ね……。」

「もう、お兄ちゃんにいちゃんは五年生、あたしは三年生よ。ねっ、お兄ちゃん。」

お父さんとうさんが、なにかいいかけるのへ、舞まいがふふくそうにことばをはさんだ。

「そう、あす、四月一日からはな。でも、だまって、だまって。ジュモンのひみつが、今こそ解とけるんだぞ。」

学まなぶはお父さんとうさんのことばを待った。

「これは、百人一首ひゃくにんいつしゅという日本の古い歌のなかのひとつなんだ。まあ、かんとんにいうと、『待つと聞きさえしたら、すぐに帰ってこようと思う』という意味なんだが、そういえば、たしか、いなくなつたねこをよびもどすおまじないだなんて、聞いたことがあつたな。」

学まなぶは意味がわかつてしまうと、ジュモンのありがたさが、一ぺんにふつとんでしまったような気がした。

「なあんだ。やっぱり、へんなおばあさんの教えてくれたおまじないなんて、迷信めいしんくさいな。」

「そんなことないわよ。わたし、こんなに待っているんですもの、クウがあの紙を見たら、すぐに帰ろうと思うわよ。」

舞は、なきそうな声で、学をにらみつけていった。さっきは、「ねっ、お兄ちゃん」なんて、味方のような顔をしていたのに。

「そうだな。クウはりこうなねこだったから、舞の気持ち、わかってくれるよね。」

星を見たり、昆虫を調べたりすることが好きで、いっぱしの科学者を気どっている学にとって、迷信のようなものは信じたくはなかった。でも、悲しそうな、うらめしそうな舞の顔を見ると、妹のために、つい、そんなふうにいってみた。それに、あの歌を、そつとつぶやいてみると、なんとなく、クウがどこかでそれを聞いているような気持ちにもなるのだ。

マツトシキカバイマカエリコム

かたかなだけで書いたあの文句が、電報のように空をとんでいっておくれ。クウよ、帰ってきておくれ。

2 お月さまをとびこえろ



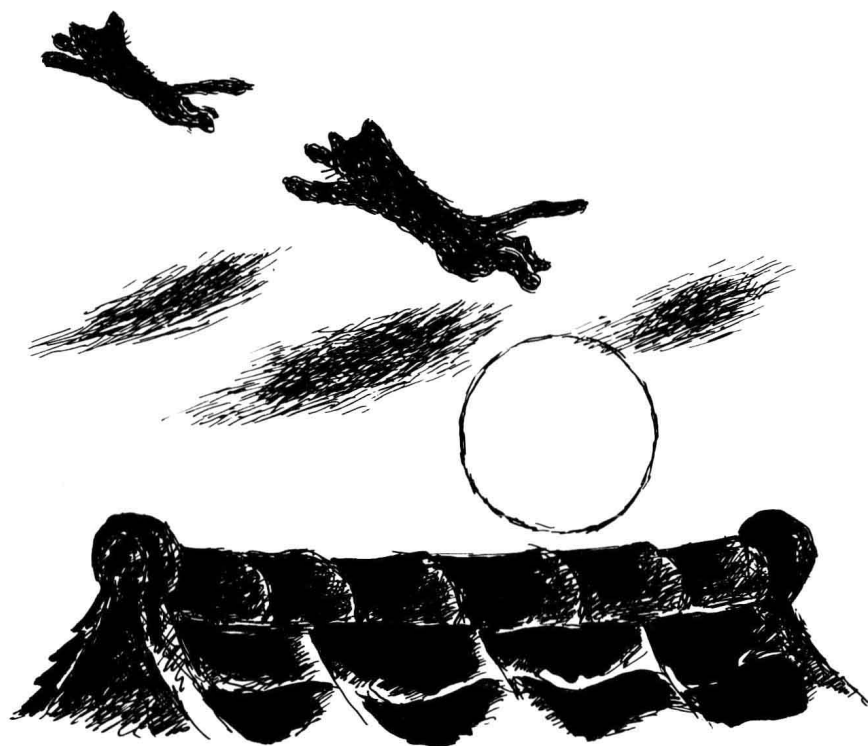
その夜、ゆめのなかで、学^{まなぶ}は手紙を読んでいた。いつもくる郵便屋^{ゆうびんや}さんが、ちゃんとどけてくれたものだ。

ボクをさがしているのなら、カサスキに
おいで。ネコになつて、お月さまをとび
こえてごらん。

四月一日



まなぶさま
まいさま



やっぱりきたな。学^{まな}はそのとき、はじめからそんな手紙がくるのを待ちうけていたように思っていた。—— だけど、ネコになって、お月さまをとびこえるって、なんのとだ。それに、カザスキってどこだろう。

首をかしげながら、ふとむこうを見ると、まっ黒い影絵^{かげえ}のような屋根のすぐ上に、みように赤い満月がのぼっていた。そして、これも影絵^{かげえ}のようなねこが、屋根の上を歩いてきたかと思うと、ぴいといととびあがって、満月^{まんげつ}をとびこえたのだ。しかも二ひき、つづいて。

ふしぎなことに、月をとびこえたねこは、屋根にはおりてこないで、一
びきずつ、空のなかに消えていってしまった。

あとには黒い影絵かげえの屋根と、赤い月とが残のこっているだけだった。

ああ、夢ゆめだなあ。そんなことを思いながら、学まなぶはゆめを見ていた。

よく朝、食事のときに、その話をするとう、お父とうさんは、

「ゆめだ、なんていわなければ、エープリル・フールのけっさくだったんだがなあ。」

といって、にやり笑わらった。

「だって、ほんとうに、そんなゆめを見たんだもん。」

学まなぶは口をとんがらせて、お父とうさんに抗議こうぎした。

すると、まだ、なにもいわれないのに、舞まいもおこった顔で、ひっしにな
っていうのだ。

「わたしもゆめを見たわ。クウが、はり紙を見て帰ってきました、って、
ほんとうに帰ってきたのよ。」

「そうね、ゆうべのはり紙のおまじないが、きつとクウのところへとどい

たのよ。あなたたち、ほんとうに、いっしょうけんめいだったものね。」

お母さんかあにいわれて、お父さんとうもすまなさそうにいった。

「ほんとうに、クウが帰ってくるといいのにな。」

——「ほんとうに」ってことは、みんながつかつたな。もしかすると、「ほんとうに」なるかもしれない。

学まなぶは、きゆうにそんなことを思った。

「でもさ。ぼく、はつきりおぼえてるんだけど、カザスキってどこだろう。今までそんなところ、聞いたこともないのにね。なぜ、ぼくのゆめのなかに、知らないことばが出てきたんだろう？」

「あら、学まなぶはおぼえてないの。お父さんとうの、おばあちゃんのお里さとで、あなたが幼稚園ようちえんのころかしら、夏、一度つれていったことがあるのよ。」

お母さんかあにいわれてみると、古いおばあちゃんのお里さとというところへ、ちっちゃいころ行ったような気がする。

「石鎚山いしづちやまのふところのなかっていったらいいかな。ここからはずいぶん遠いから、もう、お父さんとうもめったに行つたことはないが、山のなかだから

夏はすすしくっていいところだよ。風という字に、スキというのは透^{とう}明^{めい}の『透』。ほら、こんな字を書くんだが、谷川の大きな岩に、ほらあながあいていて、ま夏でも寒いような風がふきだしてくるところもあるんだ。」

「クウが、あんなに遠くまで行くわけではないけど、学^{まなぶ}ちゃんがちっちゃいときに聞いていたことが、ゆめのなかなかで、ひよいと出てきたのよね。」

お父^{とう}さんと、お母^{かあ}さんの説^{せつ}明^{めい}で、カザスキはわかった。だとしたら、ねこの行動はんいは一キロメートルくらいだというから、クウは、そんなに遠くへ行っているはずはない。

「やっぱり、ゆめはゆめかなあ。」

「でも、クウは手紙が書けないから、ゆめのなかで、通信してきたのかもしれないぞ。待つとし聞かば、今帰りこむ、だ。」

今^{こん}度^どは、お父^{とう}さんがそんなことをいう。

「今^{こん}夜^やあたり、帰ってくるかもしれないね。」

学^{まなぶ}が舞^{まい}のほうを見ながらいうと、舞^{まい}はかぶりをふった。